

名誉会員

村山朔郎先生の御逝去を悼む

本学会名誉会員の村山朔郎先生には、平成7年12月26日肺炎のため京都市中京区の中央病院で逝去されました。明治44年5月14日のお生まれで享年84歳でした。

先生は昭和10年に京都帝国大学工学部土木工学科を御卒業後直ちに鉄道省（現運輸省）に奉職、敗戦直後の昭和20年秋に京都帝国大学工学部に助教授として赴任され、昭和23年に教授に昇進して土木工学第一講座、ついで建設機械学講座を御担任、昭和34年同大学防災研究所教授に御就任、昭和46年から2年間同研究所長を勤められ、昭和50年定年退官して京都大学名誉教授の称号を授与されました。引き続き摂南大学工学部教授として昭和59年まで御勤務になられ、併せて財団法人防災研究協会理事長および同じく大阪土質試験所理事長ならびに会長として後進の指導に当たっておられました。

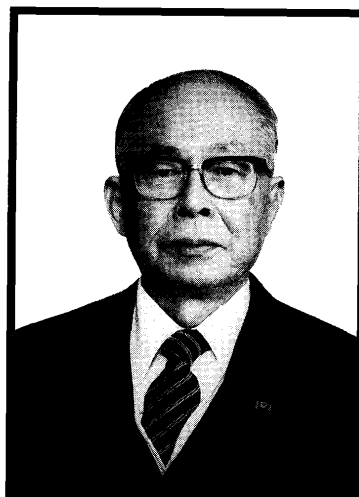
先生は鉄道省における10年間に鉄道技術の向上に心血を注がれました。関門トンネル時代を回顧して、「土の抵抗の推定法もわからずにシールドの設計を命じられたが、果たして予想どおり地中に貫入できるかどうか、シールドが本当に動き出すまでは不安で一睡もできなかった。」と述懐しておられますが、この貴重な体験が先生をしてやがて土を相手とする研究生活に転じさせることとなります。

京都大学在職30年間の御研究は、土質力学・岩盤力学・トンネル工学・建設機械学および土木施工学・地盤災害など多岐にわたり、各分野で数多くの優れた論文を残されました。中でも土質力学の基礎理論面では、土の変形特性の解明が必要なことを早くから強調され、昭和30年代の初期から平成初年度に至るまで一貫して研究の重点をここにおかけました。昭和32年、分子物理学における速度論の適用によって誘導された粘土のレオロジーモデルに始まり、晩年の砂のような粒子集合体の微視的挙動を構成関係として究明するための物性論的・統計力学的手法に至る一連の文脈に先生の強固な主張を見い出すことができます。これらの研究成果は国の内外に大きい反響を呼び、昭和44年度土質工学会論文賞および同51年度土木学会論文賞が授与されましたが、平成2年、79歳になられた先生はそれまでのご自身の研究の集大成として単独で「土の力学挙動の理論」と題する著書（A5判790ページ）を刊行され、平成3年度土木学会出版文化賞受賞の栄に浴されました。

一方、地盤基礎工学の実践面では、軟弱地盤の安定工法として凍結工法や振動締固め砂杭工法を案出されたのを始め、長大橋梁基礎やトンネル関係の各種審議会等での御貢献に対して、昭和46年紫綬褒章、同58年に勲二等旭日重光章が賜与されております。日常の温和寛容な御人柄にかかわらず、こと学問技術の分野においては、物事の是非をきっぱり決めて、いささかも微温な妥協を許さない毅然とした学究的態度を一生貫き通されたのであります。

本学会関係では、昭和30年度から2年間理事、同38年度関西支部長を勤められ、また昭和57年には国際土質基礎工学会の構成式委員会の初代委員長としてその運営に当たられました。最近、同学会に設けられている技術委員会（TC）の中で、わが地盤工学会がホスト役を務めるいくつかの委員会が際立って活発な活動を行っている素因は、村山先生のこの先駆的業績によるものが少なくないと認識されています。

村山先生は教育者としても秀でた人物でした。京都大学と摂南大学で先生の薫陶を受けた技術者や研究者は多数おりますが、先生の高潔な御人格に魅せられるとともに、温かい赤裸々な御人柄に触れた幸福感は終生忘れることができません。そのわずか2箇月半前に他界されました百合子夫人に幽界で再会されていただけます先生を偲び、心からお二人のご冥福をお祈り申し上げます。



（赤井浩一 京都大学名誉教授）
社団法人 地盤工学会